

2012年6月

環境カウンセラー、長野県環境審議会委員
特定非営利活動法人 いいだ自然エネルギーネット山法師
事務局長平澤和人

地産地消とスローライフで子供達の生きる力を育む

1 化石燃料ゼロハウス「風の学舎」の建築と利用状況

NPO法人いいだ自然エネルギーネット山法師では、化石燃料ゼロハウス「風の学舎」を会員の手作りで建築し、2008年5月長野県飯田市下久堅地区にオープンしました。建築には地域の木材、赤土、漆喰などを用地伝統工法で仕上げた他、エネルギー確保は太陽光発電、風力発電、太陽熱温水器、ウッドボイラー、薪ストーブ、囲炉裏、カマドなど8種類の自然エネルギー施設を組み合わせています。地球環境の保全や資源制約への対応が求められる中で持続可能な地域社会を築くためには、資源やエネルギーの地産地消に軸足を置く時代だとの認識の下に活動しています。建築後、スローライフを体験できる館として広く一般に貸し出すと共に、「自然の恵みを暮らしに活かす」をテーマに、囲炉裏やカマド利用、豆腐や味噌づくり、炭焼などの体験学習を受け入れています。児童から大人まで幅広い年代の人々が利用していますが、自然素材の建物、花や緑に囲まれたオーガニックな環境に加え、中央アルプス一望というパノラマの中で訪れる子供も大人も心からリフレッシュできるようで笑顔が絶えません。親子でカマド体験に参加した母親が普段子供がご飯を余り食べないけれど、カマドご飯をお代わりしたのには大変驚いたと仰っていました。この他年間を通して1000人余の視察研修を受け入れており、施設見学後に自然エネルギー等についての講話も行っています。

2 子供達のストレスを増加させる社会環境

文部省による2010年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」によれば、小中学生のいじめや不登校件数は各決して少なくはないですがこの10年間で横ばいか減少傾向にあります。一方暴力行為発生件数は調査開始以来今日まで増加傾向にあり、1000人あたりの発生件数で比較すると小学校は1988年度に対して平成2010年度では5倍、中学校では1984年度に対して2010年度では約28倍となっています。私の住む田舎（長野県飯田市）でも特に中学生の暴力行為の増加など学校秩序の崩壊が深刻化しているとの声が聞こえて来ます。

子供の行動は社会の健全性を表すバロメーターですし幸福度を写す鏡であるともいえます。何故このように子供達が荒れるのか……。我々大人は本当に子供達の気持を理解しその本質的な要因を取り除こうとしているのでしょうか？

今日、子供達の成長過程で心身面に大きな影響を与えていると考えられる社会の側面をいくつか挙げれば

- ・ 経済至上主義の蔓延 ・ ネット社会の進展（有害情報、視力低下）
- ・ 競争社会、成果主義の浸透（高収入のための小学生からの受験競争など）
- ・ 身近な緑の喪失と無機質な住空間や町並みの拡大・化学物質の複合汚染等 です。



子供達のカマド体験

これらの影響は都市部だけでなく片田舎の隅々までまた国の政治から個々の家庭レベルまで浸透し、結果として子供達のストレスへと繋がっています。家庭、学校教育、産業界、マスコミ、政治・行政などの姿勢が大きく問われているのです。物資溢れる今日でさえGDPの拡大が最重要との価値観に支配された社会の中で多くの子供達は目標や居場所を失い苦しんでいます。いくつかの要因を挙げましたが、日本社会に伝統的に根付いていた良き価値規範の喪失と並んで影響が大きいものとして、住空間やまち並みの無機質化を指摘したいと思います。これらも経済至上主義の産物です。「良き子供は良き**家庭**に育つ」といわれます。いつかはマイホームをと夫婦で夢見ている「ホーム」の意味を理解している人は少ないのです。「ホーム」という英語は明治の中頃日本に入って来ましたが「家庭」と訳されました。単なる家はハウスです。家と庭があってはじめてマイホームと呼べるのです。先人は、寝起きのための建屋のみでなく土や緑がともにあってはじめて子供が良好に育つ環境が整うことを見通していました。

「裸のサル」の著者でイギリスの動物行動学者デズモンド・モリスが1970年代に著した「人間動物園」の中で、無機質化する都市空間による人間への精神的影響について警鐘を鳴らしています。今日度々起きる理由無き殺傷事件や小中学生の暴力行為等の増加はまさにその警鐘の現実化とさえ感じます。

近年のセメントやプラスチック類を多用した住宅やまち並みは、土に還らない大量の廃棄物を生み出し、自然と共生してきた日本の良き暮らしや文化さえも消滅させようとしているほか、人間特に子供達の精神面に深い影響を与えています。これらのことに大人は気づいていません。

3 子供達としてのスローライフ体験の意義

まだ感受性が豊かな時期に現代技術や石油製品に囲まれた無機質で画一的な暮らしから一歩離れ、有機的で多様性のあるスローな暮らしを体験するのは本来人間が持っている五感を甦らせるのみでなく、子供に自身の様々な能力に気づかせるとても重要な学習です。

自らの手により身近な自然の恵みを利用し、暖をとる、煮炊きをする、生活用品を作るなど、地産地消を基本にしたスローライフを体験することは次のような良さがあります。

- ・ 自然の色、匂い、音、味、肌触りなど本物の感覚を脳裏に刻む
- ・ 自身の手で作り出せ繰り返し維持可能なヒューマンスケールの良さを知る
- ・ 自然と人の関係「自然の恵みや自然の脅威などが暮らしや文化に反映」を知る
- ・ 不便さのゆえの協力し合うという良さや各自の特技が生き役割がある事を知る

子供達が大人になり社会生活で行き詰まったとき、ストレスで押しつぶされそうになったとき、少年期のスローライフの体験はそれを受け止め緩和するクッションの役目を果たすでしょうし、いざ災害時においても生きる力となります。また、様々な社会の矛盾を克服しようと行動するときも、このような体験はきっとその基軸となる考えを形成するヒントを与えてくれるものと確信しています。

熾烈な競争社会、激しく変化する情報化社会に身を投じる一方でヒューマニティーを持ち続けられるバランスの取れた人間形成のためにも、幼少期はなにかんづくあらゆる世代で自然と共生するスローな暮らしの体験はますます必要性を増しています。